2020年3月25日

山代郷南新造院跡（四王寺跡）第８次発掘調査　記者公開資料

松江市埋蔵文化財調査室

新たに見つかった建物跡

山代郷南新造院跡は『出雲国風土記』に登場するお寺です。『出雲国風土記』は733年（天平5年）に完成した書物で、南新造院は「出雲臣弟山」という人物が建てた寺であるということが記されています。

昨年度の発掘調査では、お寺の門と思われる建物跡や、門より古い時期の建物がみつかり、南新造院の当時の姿を明らかにするうえでとても貴重な成果が得られました。今年度は門が見つかった場所から、お寺の南北の軸に合わせて、まっすぐ南へ向かった場所の調査を、お寺の範囲（寺域）の南の境を明らかにすることを目的とし行いました。

調査の結果、新たに掘立柱建物が2棟見つかりました。このうち1棟は、9本の柱穴が見つかっており、南北に2間、東西に2間以上の総柱式の建物であることがわかりました。総柱式建物の柱穴は、柱の痕跡がきれいに残るものと、柱を抜き取った痕が残るものの、2種類の柱穴がありました。柱を立てるために掘り込んだ穴の埋土から須恵器の高坏や蓋の破片が見つかりました。これらの土器は形から、7世紀頃のものと思われ、南新造院が機能していたであろう時期より古い年代のものでした。このことから、総柱式建物は、7世紀以降に建てられたものと考えられます。

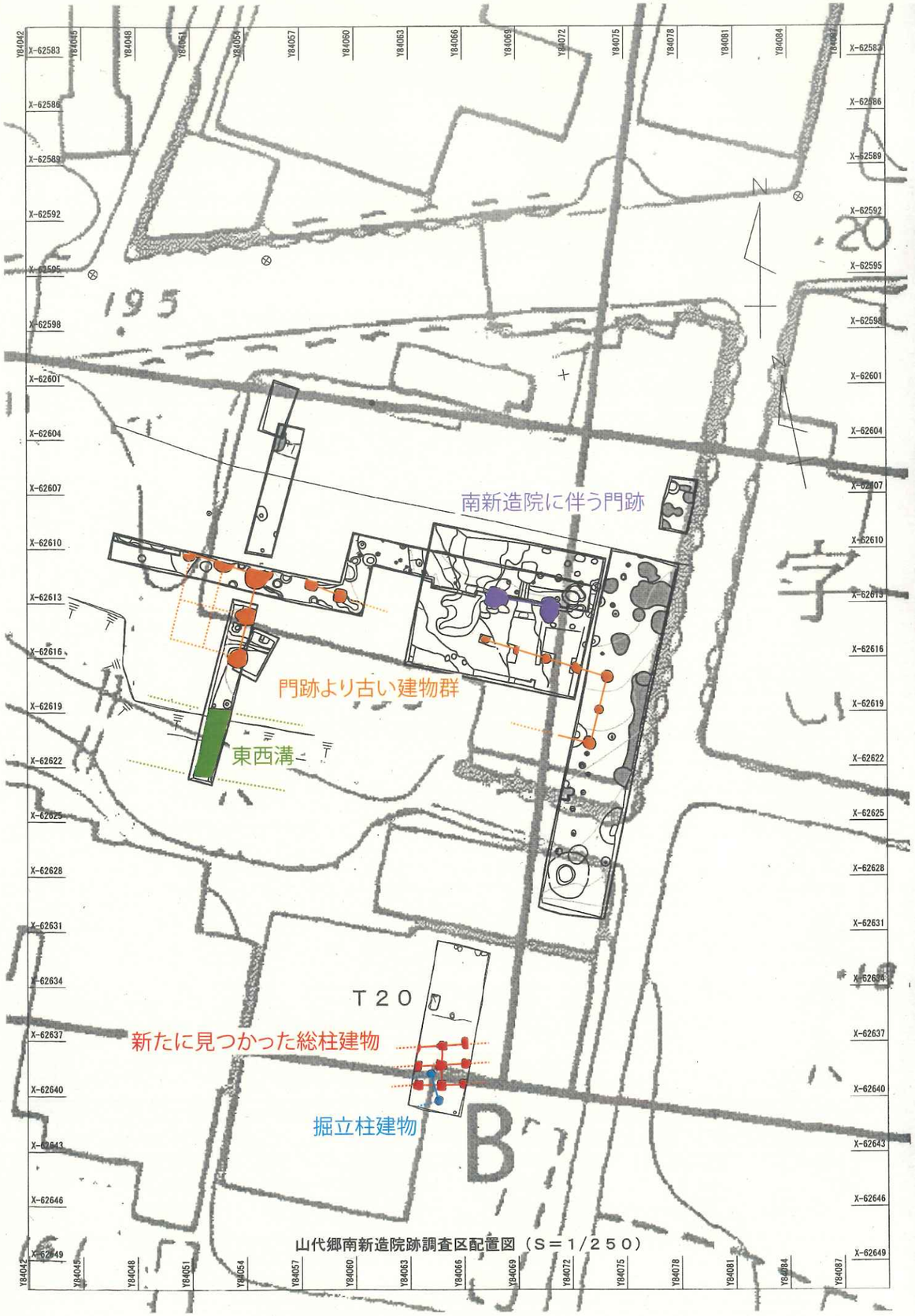
建物の性格について

今回見つかった建物は柱の並びから、倉庫か楼のような建物構造であったことが考えられます。平成28年度の調査でも同様の構造をした建物跡が見つかっています。

現在南新造院では「南新造院に伴う建物」と「南新造院が機能した段階より古い時期の建物」の2時期の建物跡が見つかっています。今回見つかった建物がどちらの時期に伴うものなのか、今後周辺の調査を続けながら検討していくことが必要です。

検出した総柱建物跡（南より）

遺跡位置図 (S:1/25,000)



山代郷南新造院跡調査区配置図（S＝1/250）